

①

亜墨利加より帰来

土州人漂流記

天保十一庚子年正月 漂流

嘉永五壬子年 帰国

土州宇佐浦鯉船

船頭 傳 蔵

四十九歳

水主 重 助

年不知

同 五右衛門

廿九歳

右三人共兄弟に御座候

同 虎右衛門

三十才

万次郎は幡多郡 カシキ 万 次郎

中濱の人也 廿六才

右の者共、今嘉永五子年より前十三年巳前正月五日

漁事の為乗船を以宇佐浦を出、五日・六日、はえ縄と云事を
をして居、船南海に走、七日の日に至り、朝の風強く、八

②

え縄桶三つ迄流したるを、二つ迄取上げ、東の内本のマはなに漂ひ、

夫より再び乾の方へ流され、櫓四挺共ことごとく折損し、只風に
任せて流れ行。十日風雨増ますつよく、衣服各々氷り、患難

甚し、十二日の暮方に至り、藤九郎という鳥、海上に浮ぶを
見て、船頭より一同へ申候は、此鳥浮は必近き辺に嶋有べし、

各々心を付べしとて、海上を見渡し候処、果して
一つの嶋有之、辛じて此島近く船を寄けれども、岩石

屏風を立たる如くにして、船を着べき所なし。 兎角
する中に、少し平かなる所を目当に船を付け、五人共上陸、

是十三日四つ時頃の事也。(別写本、兎角)
各飢に臨み、舟破折れ、しかく働出来がたし。 岩に取付

たるまゝ、手に流れかゝる海苔の類を取り食し、是にて
其様思ひやるべし。

一 其嶋に食物なく、右藤九郎と申鳥、巢をくひ居たるを取り、或は
乾し、又は直に汐にもみて食す。

一 水無ふして甚難義す。漂着の砌、水桶三つ、磯によせ
たるを拾ひ取り、岩より滴る水を取置て飲也。其水も少く、

日和続き時は切れ候まゝ、小便を手に溜、吞て喝を凌し
が、夫とても飲物少ければ、小便も至て少く成し由也。

一 磯に岩の穴あるを、常の住居とし、東向也。

一 島の廻り半道計、草木を不生、シャシャブア声シカヤ茅のるい
有、所に寄て生ず。上平にして井有、此に溜りたる水を

飲て大に力を得と云。又墓のごとき物有り。

- 一 四月中に至り、藤九郎鳥巢を立。食物なく、磯辺に出て海苔の類を取食す。此藤九郎鳥、子を育るに、鰯又は鯨の肉を啄つば来る。是を追落して魚肉を食するを得たり。

- 一 五月三日四日頃は、一同飢て働得ず、其中にも重助病躰にして、以の外病臥したるを、海苔の類を取与へ、兄弟共、看病す。

- 一 万次郎儀は、斯計かへはかり飢に及ばずといへ共、氣丈者にて、元氣を不損、健也しとぞ。

- 一 五月三日四日頃、沖合より大船来。帆折の磯寄したるに、衣を括くくり、是を上げ招く。右大船島近くよせ、インゲン豆のごとき小舟を下し来り、五右衛門、虎右衛門万次郎を乗せ、帰らんとす。尚跡に式人残り居るよし仕立して、再び舟をよせ、伝蔵、重助をものせ帰る。

- 一 此大船は、大東洋アメリカ国の鯨船にて、船頭を「アイツヘル」と云、傳馬八艘積の船也。

- 一 洋中、鯨を取るには、鯨を見付し時、八艘の伝馬舟を下し、モリを以て追付、突よし。肉と皮との間に長刀のごとき刃物を入、皮を取り、肉は洋中に捨置。前に記す藤九郎

③

鳥の鯨の肉を啄つば来る。則鯨舟の捨たる肉なり。

- 一 鯨の油を取は、前に取たる油カスを焚、取候よし。油は

樽に詰、又蝋燭のごとき物に製す。

- 一 其年の霜月、ウツフ国に着船す異人はウの字を除てハフ国といふに似たり
- 一 雨の日は、盃をうつむけたる如き笠を冠り、日和にはト藤にてあみたる笠を着、此笠の後に穴あり、夫よりクテにて打たる髪を出し、垂るゝ髪は、日本惣髪のごとくなるを、クテに打、女の髪は天神モクヒ○○○と云が如し、白粉・紅などは用ひず。欄外 按にむすび歟

- 一 上品じょうはんの人は、常に鉄炮を携、日本の帯刀の如し、上下とも杖をつく。紫檀黒檀の類にて製す。

- 一 ハフ国大さ大概四国位、七島有之、甚繁荣す。此国の津とす。西洋国より船入津し、日本大坂の如き地にて、遊女町などあり。

- 一 件の鯨船、此国に入津し、アメリカ国より置所のタツクチョチと申役人と預置、鯨船は万次郎乗せセッセッセと云所に着船、是よりアメリカ国の中、船頭の住居する地也。

- 一 万次郎の外四人は、「タフタチヨチ」の世話に成居たれども、言語不通、彼者式朱判と寛永通宝を出し、此国のものなる哉を仕形す。四人共平伏すれば、頓やがて日本人と暁さとりし様子也。

- 一 四人の者共、「タフックチヨチ」に乞、渡世せん事を望む。依之「タックチヨチ」世話にて荷物日雇など勤むと云。

ハフ国の時候、日本の九月の如く、年中フシヤ吉枚着して宜し。

タツクチヨチ ドクタージョージの事か？

一 祭りの事は、アメリカの教にて、月の七日く、日本の元日の如く、家々戸閉、祭りをなす。是は六日世界成就の教にて、其翌日七日に天神を祭るよし也。

一 食物は田芋、唐芋定食也。其中に麦は上食也。

米は諸国より積来れども、上品とせず。魚類は子鯛類。

廻りは日本に不異、磯魚は日本に無之魚多し。漁事

④

不調法也。日本国海土の如きもの有之、海中に入て

岩の底に居る海老を取り来る。

一 家は古きは力やぶき也しが、五十年前、アメリカより

此国を開く時教て、今は板、又は石にてふく。板囲の

家多し。此屋根をふく石は、湊口に大石有、板のごとくへ

げるを取てふくと云。寝時、戸棚のごとく出来し所に入て

臥。都て寝姿を人に見するを嫌ふ也。

一 時を告るには、湊口に六貫目位の大砲を居て、是を

打申候由。

一 七島一王有り。王死する時は、棺に納、土蔵の如き屋に入、

祭をなす。土を以て埋すと云。忌中に笠をきる事、日本

に同じ。家老・土格は棺を用、下品は火葬也。棺は日本

の製に似て臥棺也。足の方、別て細し。

一 傳蔵始め三人は、荷物・畑作の日雇をなす。重助は癩氣

の由にて終に病死す。扱、芋を作るには、日本の稻を

植るごとく、莖をきりて植れば、根を生ず。肥しに不及、三人

共、家作して百姓の業をするといふ。

一 右三人、彼国の役人に乞ひ、帰国いたし度由を申入、

則役人の始末をもらひ、鯨船に便を乞、乗船す。

虎右衛門は存寄有之、彼国に居留る。此世界の下を上陸

すれば悉く乗通て、エゾ地に至る。エゾ人、篝を焚

甚用心す。上陸すれば悉く逃走て人影もなし。

是非なく再鯨船に乗てハフ国へ帰る。彼国に

至て六年ぶり也。

一 万次郎はアメリカ国着船の後、「フイッヘル」の世話

にて、日本寺院の如き家に至りて、手習学文す。

後には用夫等して師匠への礼、書物等買ひ申候料等は

自身に働出し、「フイッヘル」には食物の世話にのみ成

候迄の事也。其内に「チヒタ」と云師に付、学びたる事

六ヶ月程の事も有之とぞ。

⑤

一 アメリカ国政、大抵日本国に同じ、十二ヶ条の法令有、

煩はしき事なし。

一 王は七人有、北アメリカ国三十六国に分る。時候日本に

同じ、四時(季)有り。風俗はハフ国のごとく、王は国中の

賢人を選び出し、四年持也。至て賢なるは、八カ年も持と

云。往来等は一僕位にて至極かるき躰也。

一 アメリカ国、近年アラントより世話にて開きたる国にて

行事も蘭に類す。年号は開きてより只一つの年の号にて

いつ迄も通る事のよし。一年十二月、日本に同じ。正月
規式などはなし。

一 往来、車に乗常は十六七人位のる、蒸気船のごとく、火を以て
車を驅かる、又蒸気船も有と云。空船は甚制禁にて
当時是なし。

一 文字は二十六、そろ盤は角にて製し、日本と不同、大
数を積るに弁利也とぞ。

一 人物は篤実寛仁にて、悪をなさず、人殺し・盜賊など
都てなし、もし適たまたま有ば、是を顔しるに法有て、立所たちどころに捕
るゝとぞ。

一 婚礼の式は、縁組とて、日本の引鮑遣の如き式済めば
則其女を連、物見遊山杯に至る、常の事也。婚礼は
神に告つげて帰り、夫婦と成。人情至て多姪なれども、別は
正しと云。

一 麦の粉へ玉子・油・塩等を入、蒸たるを上品とす。是は
パンと云。

一 上品じょうひんの人は酒を不飲、のむ共聊かのみ申候。下品げひんの者は
のむ事、日本人の如し。酔人は至て忌嫌いきらふ、是を賤
しむと云、酒の品は日本よりの悪し。

一 夫婦の情、至て厚く、家内睦まじき事、余国類なし。

一 近頃南北アメリカ国边境の民争より合戦有、北

⑥

アメリカの勝利成由。此戦争中、万次郎鯨船にて近く見たり。

一 文武は稽古盛也、刀鎗の仕方し方も有り、尤早馬を修行
す。驢馬はあれ共、馭よにて日本の如き馬也。

一 器物、陶器はなし、硝子・錫の類なり。

一 医は未だ不開、尤蘭国より出し医者参り居候、日本
病と云事流行す。大熱病也、此療治、桶に水を入、病人
を其内に入れ、又土中に躰を埋め、冷して熱をさます
と云、故に病めば必生る人なし。

一 西洋種痘、何方も有、アメリカ国は痘出れば痘を掘り除く
療法あり。是にて人を損する事なし。故に種痘に及ばずと云。

一 鳥獸大躰日本のごとし。虎・象有り、獅子はなし。

一 大木多し、日本等にて決て無之大材也。

一 切支丹の類、彼の国にても忌よし。

一 万次郎義、フィッヘルに従い、又は独立にても鯨舟に
乗り、世界を廻る事度々也。日本の沖へも四五度

廻り、五度ぶり奥州へ上陸の志しあれ共、上得あがりず。

一 日本商船に逢あは、ニ夕桶遣し候事有。鯨魚六七百本
取る時は帰国し、又は余国に是を売、或時は氷海に
至る、此海には舟の子丑に鋸を仕掛け、氷を割、通行す。
又、氷山海中に有、此海中の鯨、寒氣強故こに鈍くして
取易し。

一 天空の内、ジャガタラ黒坊国へも上陸す。大黒坊は赤道
直下の国にて色黒、鍋すみ塗たる如く也。蘭人常

に乗ずるは、眞の黒坊に非すと云。此国食物はカシハの実

を食、ヤシは日本のシユロに似たり、葉取、足手腰に纏ひ。
又傍にも一種の裸国有、此国遊女類有、是もカシワの
実を食、人死すれば、集りて食バン、アヘン烟草の類を
遣して交易す。

一 或時、諸国を廻り、ハフ国へ上陸の節、虎右衛門等三人に逢、帰
国の約をなし、再びアメリカへ帰る。是漂着の節、別し

⑦

より六年ぶり也。此時伝蔵・五右衛門はエソへ来り、帰国し
て未だ湊へ舟がかりの節なり。

一 万次郎事、右帰国の約をなせしより、金を貯へざれば、

其儀難調と工夫して、南アメリカ国の金山に行て

金を堀。此地温泉有之、金を自然に温泉にてわき

かたまりたる物多し、一度金を取、帰り、家人等に心の中

に暇乞して、再び金山に行とて、ハフ国へ逃帰り、

伝蔵等に会し、小舟を造り、アメリカ国商舟に使

を乞、乗船して琉球国へ着岸す。右商船に別る

時、ハフに残る虎右衛門へも無事に帰国なしたる由、又虎右衛門

も何卒帰国可致旨文通す。

一 虎右衛門と俱に帰国の筈の処、如何にしても難儀との

存念にて、ハフに留ると云。

一 万次郎、アメリカに在し時、「フィッヘル」殊の外寵愛し、

学問等も能出来候に随ひ、往々は家相統の心持にて、

己が姪を縁組致させ置たる由、万次郎、フィッヘル、又妻に

すべき女、甚不便に存候得ども不得止事、帰国の心切也
しかば、ハフ国出帆の節、細々と文認め、頼み置たるよし、
今に恋しさの情去らぬ咄也。

一 ハフ国より携来道具、又琉球にて買たる道具等

長持に三つ、尤小なる長持也。世界をわる鏡・世界の図

七枚 四枚は長崎
にて御取上 アメリカにて堀たる金・書物数十

巻・日記・アメリカにての書翰数通・地理道具品々・

鉄砲三挺・衣類、右の内にて長崎にて万次郎へ御渡

の品々・蒲団・衣類品々・世界図三枚・鍋釜の類・アヘン烟草

少々、コシハツ、此外尚有之心得故、大略右の通。

一 ハフ・アメリカともみそ・せうゆ類なし。塩にて味を付る。

一 琉球より薩州の御作配にて、薩州へ来て、月代杯して

日本の姿と成候

一 長崎にて揚屋入に成り、揚屋と申せども寛なる事にて、

⑧

日々浄留里語りの類も来り、此時より次第に日本語

を覚申候なり。

一 アメリカ国、日本詩歌の類有、是又道中にて唱歌を

謡事、其文を和解すれば

向ふの山坂より 恋しと思ふ人が パレクリく

くる目には泪を挟て

一 ハフ国に日本人持太刀有、是を以て首を切よし

申伝、武勇の国也と称する由也。

五人の者へ見せたる式朱判・寛永通宝は、大坂の者、以

前流され持渡る由也。

此度も紀州人、ハフ国へ流され、宇佐浦人ちは少し早く帰国して、長崎奉行へ御渡被成候由。

以前浦賀へ渡来る大船は、全く軍艦にもあらず、

測量等する船也、子細は日本の地測量の節、又鯨

船なり、漂流の節、薪水の恵を得ん事を頼度

由、若も容易に不相成時は、人質にても置可申義、

申入候言の処、日本人殊の外騒ぎたるとてあきれ居

申候由、一躰日本人は短気なる者と云。彼国は寛

仁なるのみならず、只今開申国がら中く他邦

を伺ひ取る巧みなど決てなし。

彼国をイギリス人少々指(持)居申、交易の地とす。

アメリカ国王の居は、平地屋敷にて、大名類に大城

を構へたる数多なり。

彼王府の上、大成る鏡を設て、数万里の中、其鏡に

映りて掌たねいしを見るがごとし。

一度王たる人、隠居せば、隠居料を得て安樂也、

官人等も往来の権威を取る等、決てなし。

人品は上下衣服の色を分別す。

民百姓たり共、学問次第にて挙用す。

⑨

用ゆ。

アメリカ国、今最中開くる国にて、學術年々精に成。

アメリカ国船中に色々の道具を入、舟の何百里来りしといふ事を知る道具もあり。

万次郎携来る道具に、やすりの類、又は樽屋道具

の類多し。是は船中諸道具を直すもの也。

居宅は硝子の障子を入、又敷物はラシヤを用ゆ。

ラシヤを織るには、車を仕掛、あやすりにて羊の毛を

と取り、夫を糸に引ませる車仕掛あやすりにて、人力を費さず。

万次郎アメリカにては「チョンマン」と云。異人「メハシタチョン

マン」と呼、「メイシタ」日本にて「殿」といふが如し。

蘭に先生という事を「メリケトメル」と云。

クロン坊、耳鼻脇に隈を入る。

伝蔵・五右衛門はハフ国にて、日本の名を改めず。然ども

伝蔵、元の名を筆丞と云。かの国へ筆丞と云事は

如何いかにいへども、得い云えず故に伝蔵と改。

ハフ国の人、アメリカを称してメリケンヤヤと云。

諸道具・鍋の類・飯継等、錫にて、杓子はタテハキの実

を抜たる様の物を用ゆ。

時嘉永六年癸丑秋九月

学問宜人は官人にあらずとも上品の衣服を被許